

NEWS LETTER

No.15
2016.01

Contents

1. 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会について
2. 会員の活動報告ータンザニアの雨ー
3. 特集：カピックセンターの活動と国際協力
4. 青年海外協力隊50周年記念 in 鹿児島
5. 平成27年度かごしま県民大学連携講座
6. 平成27年度ボランティアセミナー
7. 第3回市民公開講座
8. 平成27年度国際協力パネル展
9. 大学生の草の根協力
10. わたしのインドネシア留学
11. 平成26、27年度「連絡会」総会報告
12. 平成27年度鹿児島県JICA派遣専門家連絡会活動報告



本号の特集は、鹿児島県アジア・太平洋農村研修センター（通称KAPICセンター）の特集です。写真は、鹿大生の研修の風景（講師は酒井マリさん）。

NEWS

会員の活動報告

稲見 廣政さん

雨はタンザニアの農民にとって大事で、雨が降るのをいまかいまかと待ちます。時には早魃になり大変なことになる。

雨の恵みへの感謝をしつつ・・・。

定期総会が開催されました

2015年度定期総会が1月9日に天文館ビジョンホールで盛大に行われました。同時開催された市民講座も大変に素晴らしい内容でした。草の根協力の喜びと厳しさも改めて感じさせられました。



鹿児島にも大雪が

2016年1月24日～25日に、鹿児島県内で大雪が。私の住んでいる伊集院町では、20cm以上の積雪。あちらこちらで車がスリップしてスタッグしていましたよ。今年もなんだかいろいろとありそうです。

編集人：坂上潤一



学生の国際交流



農学部の岩田晋子です。昨年の8月からインドネシアに留学しています。現地生活をレポートします。



農学部の野間口智です。大学で取り組んだパッションボーイズ農園の経営を通じた国際協力の事例を紹介します。

NEWS LETTER No.15

鹿児島県^{ジャイカ}JICA派遣専門家連絡会について

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会長
水上 惟文
Korebumi MINAKAMI

JICA派遣専門家とは、開発途上国のニーズに応じた専門技術や知識を持つ専門家として、JICA（独立行政法人国際協力機構）の技術協力プロジェクトに派遣され、開発途上国の最前線で活躍した人たちです。相手国技術者（カウンターパート）にさまざまな技術・知識を伝えることで相手国の技術水準の向上を図り、その国の開発に貢献してきました。

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会は、鹿児島県に在住のJICA派遣専門家（OB）のネットワーク（連絡会）です。2015年12月現在、約80名の方が会員になっています。私たちJICA派遣専門家経験者は国際協力の理解者として、また、政府開発援助（ODA）の現場の体験者として、帰国後も地域におけるさまざまな活動に取り組み、国際協力・交流の促進に貢献しています。

専門家通信

タンザニアの雨

稲見 廣政
Hiromasa INAMI

雨はタンザニアの農民にとって大事で、雨が降るのをいまかいまかと待ちます。時には早魃になり大変なことになる。

雨に関する事で、筆者の経験として、滞在した1972年ごろ～、大干ばつでタンザニアの主食であるトウモロコシの粉が無くなり、急遽アメリカから大量の家畜のエサと書かれた黄色いトウモロコシの粉が食糧として入って来たが、タンザニア人もまずくて食べなかった事を思い出す。

また、雨が降りすぎて任地が“陸の孤島”と化し食糧の運搬、移動に飛行機を依頼した時もあった。雨季、車で移動時によくスタックし立ち往生、脱出作戦も何度もあり、鉄砲水で車が流されたのを見たこともあった。

タンザニアには、雨／雨季を表す

言葉（スワヒリ語）が3つあります。それは、1. Masika、2. Vuliそして3. Msimuと大雨季、小雨季そして雨季と訳されます。

12月の前後の月が小雨季で農民は圃場を整地、



田んぼの一区画が6ヘクタール、人間100人近くの田植えの様子（某灌漑スキム）

畝を作り雨が降ればトウモロコシなどの種子を植えていく。が、種子を植えた後に雨が無く植えた種子が芽を出さずにだめにするケースもよくあり、種子の植え時が難しいようだ。

筆者は2015年11月、雨季の時期に農民の農業機械の利用状況調査のため、ザンビアと国境を接するムベヤ州のムバラリ県というところで調査のため滞在している。この県は、有数の稲作地帯で、大きなところは3,000haと、とてつもなく広く端から端まで見通せない。(写真は500分の

1の6haだけであるが写真に全景が納まらない)

11月26日の朝、調査地に出かけるとき遠くの山波にカスミがかかり、上空は雲に覆われて雨の徴候があったが、昼になるにつれていつもの快晴になった。が、午後になり一変雷雲、稲光と今年最初の大雨に見舞われ、大地に湿り気をもたらし、草地は緑になり、野生動物は息を吹き返す。雨待ち農民には恵みの雨となり、活気づくことになる。

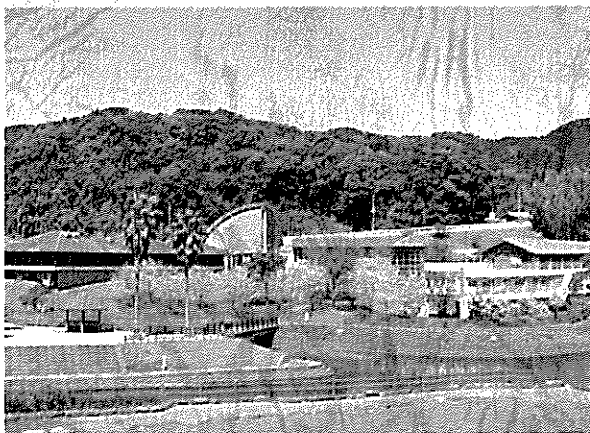
特集

カピックセンターの活動と国際協力

鹿児島県の国際交流・国際協力の拠点として開設。豊かな自然の中で、国際理解研修や、アジア・太平洋諸国等からの研修生受け入れ、世界の人々との交流イベントなどを行っているカピックセンター。編集人は学生と共に昨年の9月に研修旅行で御世話になりました。今回は、カピックセンターを特集してお届けします。

1 カピックセンターとは

カピックセンターとは、鹿児島県アジア・太平洋農村研修センターの通称です(英語名 Kagoshima Asia Pacific Intercultural Countryside Centerの頭文字をとってKAPIC Center)。鹿児島県の国際交流・国際協力の拠



カピックセンター外観

点として平成6年に開設されました。

美しい自然に恵まれた大隅湖畔に立地しており、国際理解研修や、アジア・太平洋諸国等からの研修生受け入れ、国際交流イベント、地域おこしなどを行っています。また、各種団体や教育機関などが実施する研修等にも、幅広くご利用いただいています。

平成26年度までに延べ22万人を超える利用者がおり、119ヶ国延べ4万8000人の外国人研修員を受け入れてきました。

2 カピックセンターの運営

鹿児島県の施設であるカピックセンターは、指定管理者制度に伴い平成18年度以降、「鹿児



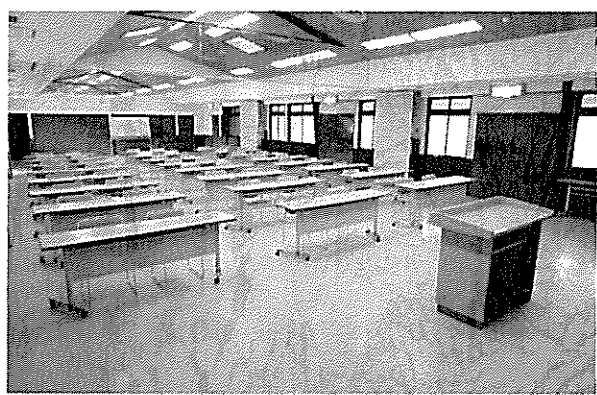
カピックセンターのスタッフ

島国際交流協力センター」によって管理運営されています。この「鹿児島国際交流協力センター」は青年海外協力隊など、海外ボランティアの経験者が中心となって活動している3つの団体（公益社団法人青年海外協力協会・特定非営利活動法人九州海外協力協会・青年海外協力隊鹿児島県OB会）によって構成されています。

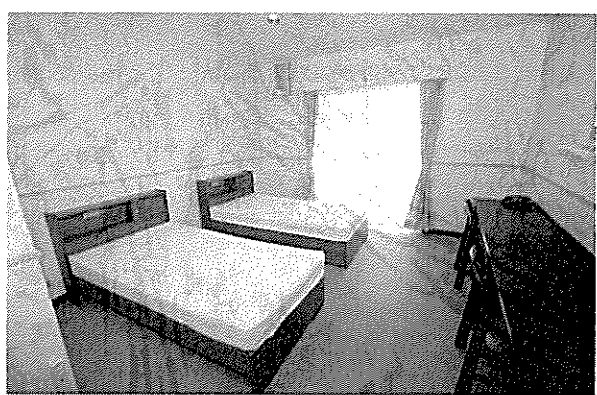
「スタッフが全員JICAボランティアの経験者」というのが、カピックセンターの大きな特徴です。平成18年度以降、鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会長にアドバイザー委員になっていただき、運営に関するご助言をいただいています。

<利用料金>

研修室利用		310円	1室1時間あたり
宿泊	宿泊室	洋室	2,400円 1人1泊
		和室	2,400円 大人1人1泊 620円 学生（大学生以下）1人1泊
	シーツ代	210円	洗面用具は各自ご持参ください
食事		朝食360円、昼食520円、夕食620円	



研修室



宿泊室（ツイン）

4 カピックセンターの事業

カピックセンターは、以下のような事業を行っています。

- ① 外国人対象の研修
 - ・日本語・日本文化研修
 - 日本語指導（初級～上級コース）、着物着付け、茶道、華道など文化体験

3 カピックセンターの施設

カピックセンターは、どなたでも利用できる公共の研修施設です。学校や各種団体、企業などの研修や宿泊に幅広くお使いいただいています。大隅湖畔の豊かな自然、国際的な雰囲気が魅力です。

<施設概要>

- 研修施設：研修室3室、会議室2室、実習室1室
- 宿泊施設：最大72名収容（シングルルーム10室、ツインルーム17室、和室2室）

- ・テーマ別研修
 - 農業、農村振興、環境保全、生活改善、地方行政、教育など
- ・観光・交流・体験
 - 鹿児島の観光地見学、学校交流、ホームステイ、農業体験など



アジア太平洋農村研修村フェスタ2015



異文化体験ワークショップ

② イベント、セミナーの開催

- ・外国人研修員との交流イベントや異文化体験などのイベント開催
- ・国際協力セミナー開催

③ グローバル人材育成

- ・学校や各種団体を対象にした国際理解プログラム、ワークショップ
- ・インターン生の受入れ

④ 地域おこし

- ・地域団体と連携した地域振興、観光振興
- ・豊かな自然を活用した自然体験、農業体験

5 カピックセンターとJICAとの関わり

① JICA研修員の受入れ

鹿児島、特に大隅地域の特色を活かしてJICA研修を実施しています。これまでに実施された主なJICA研修は以下の通りです。

分野	研修コース名	対象国（地域）
農村振興	農村振興	アフリカ、大洋州
	小規模農村地域のための生活改善活動と収入創出活動	アフリカ
農業	アフリカ地域農業・地域開発のための調査研究	アフリカ
	小規模農民支援有機農業技術普及手法	中米
	持続可能な環境保全型農業による小規模農民支援農業技術普及手法	中南米
	野菜栽培	ブータン
	育苗・生産管理（落葉果樹、柑橘類）	ブータン
	園芸栽培管理	ブータン
	園芸作物収穫管理、販売	ブータン
	普及手法及び広報	ブータン
	中東地域における効率的水利用による農業技術	中東
環境	住民参加型環境保全	モンゴル、中南米
	自然環境保全	ベトナム、ラオス
行政	地方行政	アフリカ
教育	初中等教育行政	インドネシア
	体育教育	ブータン
保健医療	離島僻地医療	大洋州



農村交流（アフリカ農村振興コース）



学校訪問（インドネシア教育行政コース）



農村フィールドワーク

- ② 青年海外協力隊技術補完研修
青年海外協力隊で「コミュニティ開発」の職種で派遣される予定の青年たちを対象とした技術補完研修を年4回実施しています。カピックセンター周辺の農村地域でフィールドワークを行い、途上国での活動に必要なスキルを実践的に学んでいます。
- ③ 国際ボランティア養成講座（JICAボランティアの応募促進）
青年海外協力隊やシニア海外ボランティアなどに関心を持つ方々を対象にしたセミナーを年1回実施しています。国際ボランティアの経験者にも集まっていただき、体験談や意見交換、応募のアドバイスなどを

通してJICAのボランティア事業への理解を深め、応募を支援しています。

6 国際協力と地域づくり

JICA研修や青年海外協力隊技術補完研修の実施にあたっては、地域の住民や学校、各種団体の協力が不可欠です。地域の方々は、普段の仕事や生活の中で研修員たちを受け入れ、国際協力に参加してくださっています。まさに「鹿児島弁での国際協力」といえるでしょう。外国人や若者から元気をもらったという声もよく聞かれます。途上国からの研修員や青年海外協力隊の候補生との交流、意見交換は、お互いに学びあう機会でもあります。地域に根差した国際協力が、途上国のためだけではなく、地域の方々も、自分たちの地域の良さに気付いたり、生活のあり方を見直したり、課題を考えたりするきっかけとなり、より良い地域づくりにつながることを期待しています。カピックセンターでは、「大隅から世界へ 世界から大隅へ」をモットーに、地域と世界をつなぎ、国際交流、国際協力の輪を広げながら地域社会づくりにも貢献していきたいと考えています。

問い合わせ先

鹿児島県アジア・太平洋農村研修センター（カピックセンター）
〒893-0131 鹿児島県鹿屋市上高隈町3811-1
TEL 0994-45-3288 FAX 0994-45-3258
<http://kopic.jp/> info@kopic.jp

青年海外協力隊50周年記念 in 鹿児島

JICAデスク鹿児島 国際協力推進員

福永 みゆき

Miyuki FUKUNAGA

2015年8月29日（土）鹿児島東急REIホテルにて「青年海外協力隊50周年記念in鹿児島」を実施いたしました。当事業はJICA九州・青年海外協力隊鹿児島県OB会・鹿児島県青年海外協力隊を支援する会の三者共催のもと、多くの来場者にも恵まれ、節目の年に値する事業となりました。

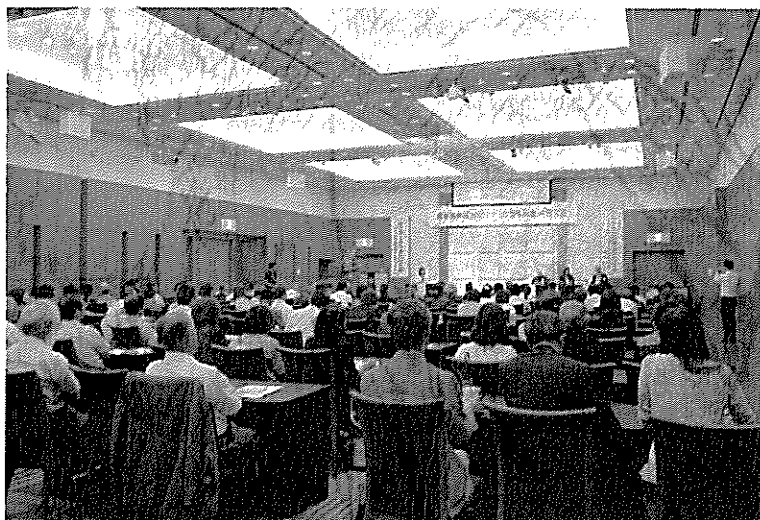
同月、鹿児島県JICA派遣専門家連絡会と共催で行った「国際協力パネル展～鹿児島と世界の絆～」も後押しとなり、50周年事業への良いスタートが切れたと実感しております。

さて、記念講演ではフリーキャスターとしてご活躍されている伊藤聡子氏を講師に招き、「私が見た国際協力の現場～開発途上で活躍する青年海外協力隊～」と題してご講演いただきました。パネルトークでは伊藤氏のご司会のもと、県内の初代協力隊員や今年7月に帰国した隊員をパネリストとして迎え、活動を通して得たことや今後のキャリア形成についてもお話しいただきました。来場者は時折感心したり、驚いたりしながら、熱心に耳を傾けているのが印象的でした。

今回、協力隊事業50周年の歩みを振り返るとともに、県内のJICAボランティア経験者の帰国後活動についても顧みる機会であったように感じます。活動の一環として、派遣中に培った「異なる角度からの視点」や「高度なコミュニケーション能力」を生かし、年間約40の小中学校で体験談の出前講座を実施しております。インターネットの普及が進み世界中の情報が簡単に得られるようになった今日とはいえ、実際の体験談を生で聴くことは新世界の発見や海外へ目を向ける学びの場となっているようです。



鹿児島県初代隊員らによるパネルトーク



熱心に聴講する来場者の様子

また、国際理解教育だけではなく自分の未来を切り開く手立てにもなっていることでしょう。その結果としてかつて出前授業を受けた「JICAボランティアチルドレン」の50周年記念事業への参加が多く見受けられました。その他にも各地区で行われるイベントへブースを出展し、県内はもとより日本中を元気にすべくマルチに活躍しております。ボランティア事業の一目的である「国際的視野の涵養とボランティア経験の社会還元」へ大きく寄与していることが伺

えます。

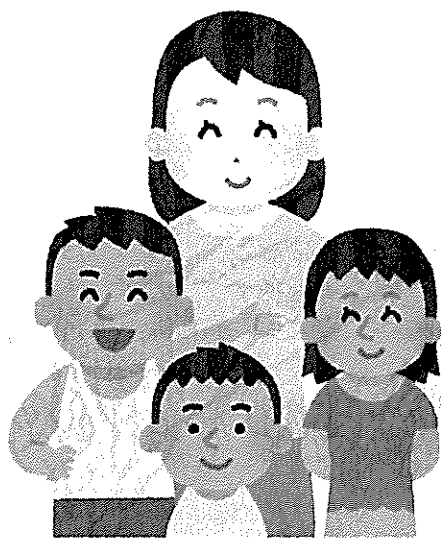
この記念事業は日頃よりご支援・ご協力いただいている方々とJICAボランティア経験者との良い交流の場にもなりました。またJICAファミリー（ボランティア経験者・専門家・JICA職員など）にとっても今後の国際協力や社会還元のあり方について再認識する場となったのではないのでしょうか。世界との関わりなくして我が生活は成り立たない=相互援助の精神、世界で起きている様々な問題から目を背けない=人道的観点。50年が単なる区切りではなく、「県民と新たに考える国際協力」のスタートになることを期待します。



交流会に花を添えたパラグアイダンス



会場が一体となったロス・ポンチョスによる南米音楽



平成27年度かごしま県民大学連携講座

経験活用講座「国際的な水産協力」

本年度で4年目を迎えた経験活用講座は、3名の講師により、かごしま県民交流センター東棟4階小研修室第2で、平成27年9月26日と10月3日に3テーマで開催された。

小山次朗先生「海洋汚染と水産物」では、JICAマラッカプロジェクトでマレーシアに派遣された折り、海棲ジャワメダカが廃水中に見出される女性ホルモン（環境ホルモン）の検出に有効であること、船舶のバラスト水廃水が日本には本来棲息していない生物を持ち込むこと、重油流出事故の影響は意外と長くのこること、ティラピア飼育で河川汚染を評価できることなど、興味深い話を聞くことができた。受講生の感想としては、「初めてでしたが、とても興味深くお話を聞かせていただきました。アジアの人たちのために協力

できることは、とても良いことだと思います。」など。

石崎宗周先生「人材育成の観点から」では、漁業技術移転で、マレーシアにはもともと無かった定置網を干満の差が大きく、流速が早いマラッカ海峡に設置する苦勞と、設置後の現地人の技術研修、今後の問題点など現地の人材育成の話に終わらず、在学を1ヶ月程度、短期の協力隊としてセントルシアやコロンビアに派遣する話をされた。受講生の感想としては、「地道に活動を続けていることがわかって、とても良かったです。これからも頑張ってくださいたいです。」など。

野呂忠秀先生「海藻研究者も暮らして考えた海外」では、フィリピン赴任中にクーデターに遭遇したこと、日本へ輸出されているミドリガイには

平成27年度「かごしま県民大学連携講座」

講座名：国際的な水産協力

講義内容：開発途上国で長年にわたり鹿児島大学水産学部が行ってきた国際的な水産協力について、その概要と関連する成果を報告する。

日時：平成27年9月26日(土)

第①回10：00～11：30

第②回13：30～15：00

平成27年10月3日(土)

第③回10：00～11：30

会場：かごしま県民交流センター東棟4階小研修室第二

第①回

テーマ：鹿児島大学水産学部が取り組む国際交流Ⅰ
～海洋汚染と水産物～

講師：小山 次朗氏（鹿児島大学水産学部 教授）

第②回

テーマ：鹿児島大学水産学部が取り組む国際交流Ⅱ
～人材育成の観点から～

講師：石崎 宗周氏（鹿児島大学水産学部 准教授）

第③回

テーマ：鹿児島大学水産学部が取り組む国際交流Ⅲ
～海藻研究者も暮らして考えた海外～

講師：野呂 忠秀氏（鹿児島大学水産学部 教授）

貝毒があること、西アフリカ、ダカールではトサカノリ、イバラノリが海岸に山と打ち寄せるが利用されていないこと、その利用を指導したことなどを話された。受講生の感想としては、「海外での派遣では、日本では想像できないようなささいな物が不足したりして、研究に多くの工夫が必要であるとわかった。海外での就業も視野に入れて進路を選ぼうとしているので、先生のクオーター

に遭遇したお話は自分のこととして考えてしまって空恐ろしくなった。」など。

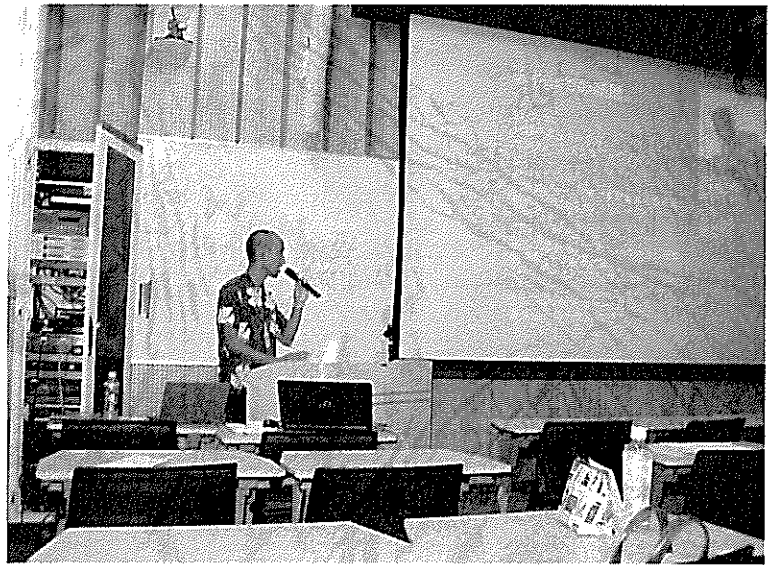
受講生は、1回目7名、2回目7名、3回目4名、合計18名であった。各講義終了後の自由討論には十分な時間をとり、講座は好評であった。このような話をもっと多くの人達にも聞いていただきたいと感じた。宣伝不足もあった。

(越塩俊介、水上惟文)

平成27年度ボランティアセミナー

～平成27年度青年海外協力隊募集説明会 & 体験談 in 鹿児島大学～

平成27年(2015年)10月28日(水)、鹿児島大学附属図書館水産学部分館において平成27年度ボランティアセミナー(青年海外協力隊募集説明会 & 体験談in鹿児島大学)を開催した。学生ならびに一般の方、合計10名が、セミナーに参加された。体験談は、マーシャルに理数科教師として派遣された青年海外協力隊OBの下平健太氏が、また、青年海外協力隊事務局中南米課主任調査員、鈴木央氏からは、青年海外協力隊の在学中短期体験派遣制度についての説明もあった。ボランティアへの応募方法の説明後、質疑応答を行い、18:00には説明会は終了した。現在、開発途上国では、29名の鹿児



島出身者が活動中で、今後より多くの方に説明会へ参加されるよう広報に努めていきたい。

(越塩俊介、水上惟文)

第3回市民公開講座

「運動会を知らないカンボジアの村で運動会が広がった」

講師：いっしょき学校をわいもんそ会
丸野 里美
Satomi MARUNO

今回の公開講演会は、青年海外協力隊OBの丸野里美さまにお願いした。講師の丸野里美さまは、大学卒業後小学校の教員をされていたが、退職して平成7年から2年間、青年海外協力隊(小学校

教諭隊員)として内戦直後のカンボジアへ派遣された。帰国後、期限付き教員として1年3ヶ月勤めた後、JICA推進員を経て、かのやバラ園を運営するNPO法人で仕事をされ、現在は(株)ア

イロードで仕事をしておられる。

帰国後、「いっしょき学校をいもんそ会」の活動を立ち上げられ、カンボジアで学校建設を支援する活動を行っておられる。活動の内容は、現地での教育環境の整備、教師の支援、地域と学校の連携強化、現地体験ツアーの実施などである。

講演は、カンボジアでの「いっしょき学校をいもんそ会」の活動についての話で、活動の中心地はカンボジア北西部のまだ地雷が完全には除去されていない新興農村地帯で、運動会活動支援と農業支援事業が現在の活動の中心になっているそうである。

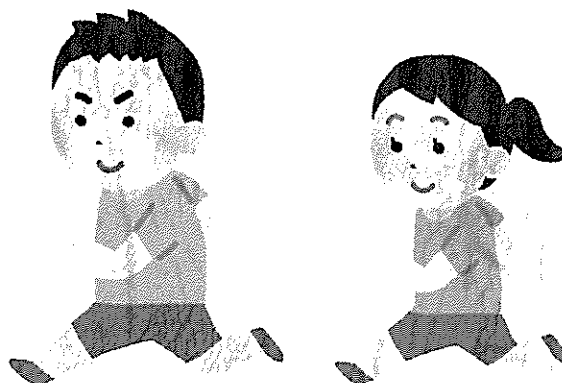
内戦中、教師、教師養成機関などの殆どの知識人は、ポルポト派に殺され、内戦が終了しても学校は荒れ果て、教育者も誰もいない状態が続いたので、会としては、教育環境の整備、教員の支援などから活動を始めた。活動当初は、日本からの援助物資の配布や学校建設などを行っていたが、コンテナ一杯の学用品も保管に警備が必要で、保管されたままで、学用品が必要な生徒には充分に行き渡っていなかったり、新築のトイレも鍵を掛け、お客さんが来たときだけ使わせるなど、物を渡すだけ、作っただけの援助には限界が感じられた。そこで、活動対象を中学校に絞り、まず、運動会を学校行事に取り入れた。日本のような運動会はカンボジアには全く存在せず、最初は戸惑われたが、初めてみると学校と地域が一体となり、朝から夕方までのお祭りのような行事となり、新興農村地域で住民同士のつながりが全く無かった地域が、運動会という行事を通して一体感が生ま



れた。運動会という学校行事が、今では地域振興活動となって、次第に周辺の地域全体に広がっていった。丸野さんのこの運動会活動を通じた村興しが、青年海外協力隊の活動モデルとして広く活用されている。

講演終了後、会場の高校生から、「カンボジアのような所で物乞いされたら、物や金を渡した方が良いか、渡さない方が良いか。」という質問があった。それに対して丸野さんは、それは非常に難しい問題で、渡した方が良い場合と、渡さない方が良い場合とがあり、一概にどちらが良いとか悪いとか言えないと答えられた。私達の活動は、物や金を与えるだけの一時的なものではなく、あくまでも自立支援が目的であるので、この種の質問にはとても考えさせられた。JICA九州センター所長の井崎宏顧問より、JICAとしても積極的平和主義の立場で、今後とも非軍事で発展途上国を支援する活動をサポートしていきたいとコメントされた。

(水上惟文)



平成27年度国際協力パネル展

～鹿児島と世界をつなぐ人々～

青年海外協力隊発足50周年を記念して、平成27年（2015年）8月13～17日（5日間）、イオンモール鹿児島3階において第6回国際協力パネル展を開催することができた。パネル展には、多くの来場者があった。

国際協力パネル展の目的は、鹿児島県在住者のJICA派遣専門家、青年海外協力隊鹿児島県OBが行った発展途上国における支援活動の様子を、パネルを通して広く鹿児島県民の方々に紹介すること、ならびに県民の方々に国際協力をより身近なものとして感じていただくことである。

平成27年度のJICA派遣専門家連絡会からの新規パネル出展者（敬称省略）は、以下の新入会員2名を含む3名です。まだパネルを作成していない専門家が多数おられるので、今後もパネルの新規作成を続けていきたい。

富岡 譲二 南米地域の救急・災害医療分野へのわが国の貢献

坂上 潤一 ウガンダ国立作物資源研究所での活動

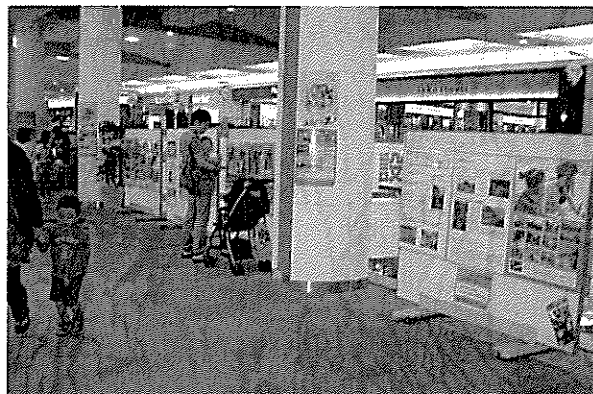
稲見 廣政 キリマンジャロ山

イオンモール鹿児島でのパネル展示は初めてであったので、今回はパネル展示のみとした。パネルの搬入・設置と搬出は、JICAデスクの福永さん、専門家連絡会の稲見さん、水上、青年海外協力隊OBの桑山さんで行った。パネル展の実施期間中はお盆と重なり、専門家連絡会や青年海外協力隊OB会会員からは十分な協力は得られなかったの、今後行う場合には時期を考える必要があると

思われる。

ただ、パネル展実施期間中のイオンモール鹿児島は、夏休み中、お盆期間中などもあり、人出が極めて多かった。パネルは買い物通路の吹き抜け側に沿って設置したので、買い物客の多くは、パネルの前を通過するだけで、パネルに目を通す人は多くはなかった。客の足を止めるためには、フェイスペイントやビーズ国旗作成のような催し物をやる必要があると思われた。催し物で子供が集まると、親が集まり、観客が集まる客寄せの相乗効果があるのだが。また、今回は青年海外協力隊やシニアボランティアの募集期間でもなかったので、募集要項の配布も行なわなかったが、折角の機会を逃したようにも思えた。

国際協力や国際援助など海外ボランティアには、2011年の東日本大震災以降、日本の若者はあまり興味を示さず、また、海外でのテロなど危険なニュースも多くテレビで流されており、若者自身も自分中心主義で内向き志向と思われるが、国際協力パネル展の来場者には、海外青年協力隊へ行きたいと言う人もいた。パネル展を恒例化すると、楽しみに待っている人たちがいて開催する側も励みになる。また、パネル展では、情報を流すだけでなく、情報を受け取ることもできる情報交換の場でもあるので、会員の方は是非ご参加ください。また、JICA派遣専門家連絡会会員で、まだパネル展でご自分の派遣報告をされておられない方は、是非、原稿を事務局か会長あてお送りください。（越塩俊介、水上惟文）



国際緊急援助隊医療チームの活動



社会医療法人緑泉会 米盛病院
富岡 譲二

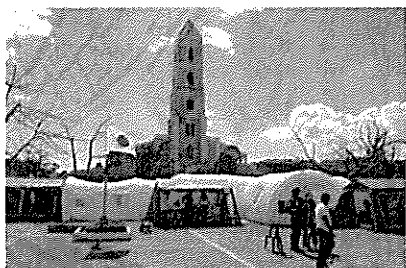
国際緊急援助とは？

わが国がODA（政府開発援助）の一環として、海外（特に開発途上国）で発生した災害に対して行っている緊急援助のことです。

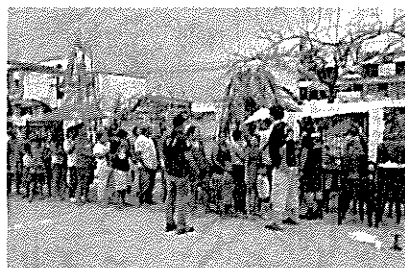
救助チーム・医療チーム・専門家チーム・自衛隊部隊があり、JICA内の「国際緊急援助隊事務局」がとりまとめを行っており、発足以来137件のチーム派遣と489件の物資供与が実施されました。

国際緊急援助隊医療チームとは？

医療チームは、被災者の診療にあたるとともに、必要に応じて疾病の感染予防や蔓延防止のための活動を行います。メンバーは個人の意志で登録している医師、看護師、薬剤師、調整員の中から選ばれるのに加え外務省の職員やJICAの業務調整員から編成されます。



2013年11月に発生したフィリピン台風災害での国際緊急援助隊医療チーム活動サイト



この地域は被害から1週間以上医療の手が届いていなかったため、診療開始と同時に多くの方々が受診に訪れてくれました



屋外でも撮影できるレントゲン



簡単な手術も行います



現地の医療機関の診療補助



被災した子どもたちとの交流

国際緊急援助隊医療チームに登録するには

国際緊急援助隊医療チームには医療職でなくても登録できます。

詳しくはJICAホームページから。

<http://www.jica.go.jp/jdr/faq/join.html>



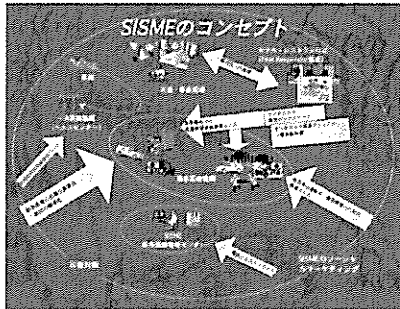
南米地域の救急・災害医療分野へのわが国の貢献

社会医療法人緑泉会 米盛病院
富岡 譲二

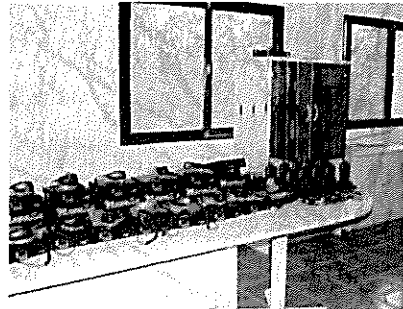
(注：文中で記載されている期間は富岡の派遣期間であり、プロジェクト自体は更に長い期間で行われています。)

サンタクルス医療供給システムプロジェクト (1998～1999年)

ボリビア共和国 (当時) 第二の都市であるサンタクルス市とその周辺地域での救急医療ネットワーク作りと人材育成を行いました。



サンタクルス救急医療ネットワーク (SISME)



救急医療情報センター



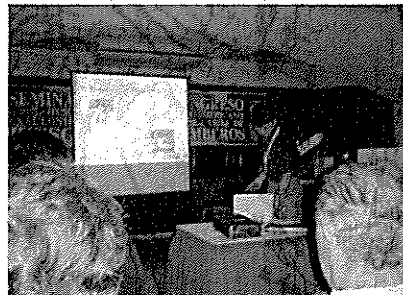
救急医療の教育コース

ヴェネズエラ防災プロジェクト (2002年)

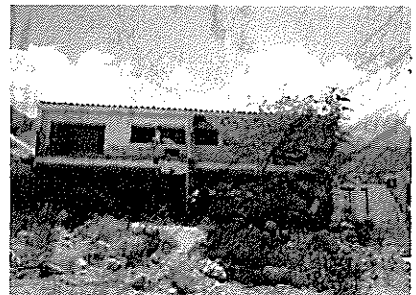
国家防災体制の一環として、災害医療ネットワーク構築に関するアドバイスをを行いました。



国家災害医療体制を提言



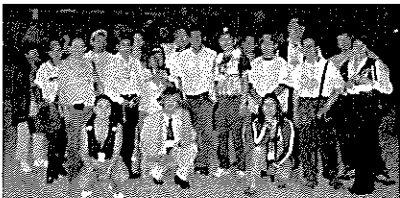
日本の救急医療体制の紹介



被災地の視察

アンデス地域災害医療マネジメントコース (現在も毎年開催)

アンデス地域の災害医療関係者を日本に招聘し、災害医療体制を学んでいただくコースを開催しています。数年に一度は南米各地でのフォローアップコースも実施しています。



南米各国からの研修生



帰国研修生フォローアップ (エクアドルでの開催)



帰国研修生によるワークショップ (ペルーでの開催)

ウガンダ国立作物資源研究所での活動

アフリカを救うコメ生産倍増に向けた取り組み

Rica Promotion Project for Hunger and Poverty Reduction in Uganda

鹿児島大学学術研究院農水産獣医学域農学系

坂上 潤一

ウガンダの基本的知識

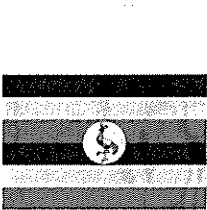
ウガンダ共和国（ウガンダきょうわこく）、通称ウガンダは、アフリカ東部に位置する共和制国家で、旧イギリス植民地。首都はカンパラで、ナイル川（白ナイル）の始まるビクトリア湖に接している。

赤道直下にあり、熱帯性気候。平均気温は21度～25度。雨季は3月～5月と10月～11月。日本との時差-6時間。

【ウガンダ豆知識】

面積：約239万km²（世界第80位、日本の6.3倍）

人口：約3480万人（世界第36位、日本の3割）



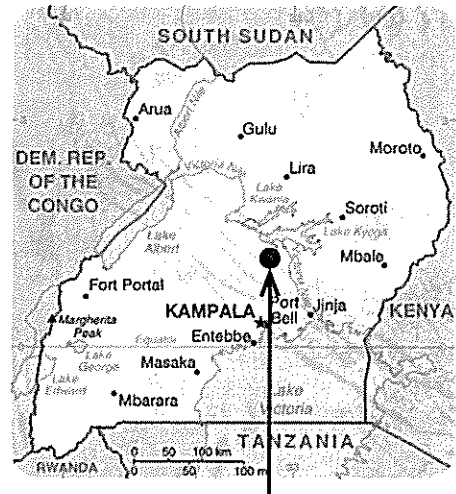
国旗



国章



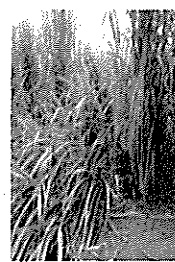
首都カンパラ



ウガンダ国立作物資源研究所

活動背景

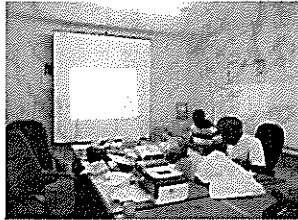
ウガンダの農業は、GDPの約20%、輸出の約48%、雇用の約73%を占める基幹産業である。農家の平均営農面積は1ha以下と小さく、小規模農家による自給自足的農業が中心である。他方、ウガンダの自然条件は年平均気温20℃、年間降水量1,500～1,750mmと農業生産に適した環境にある。また、主食作物としてプランタイン・サツマイモ・キャッサバ・メイズ・ソルガム等が多く栽培され、商品作物としてコーヒー・ゴマ・サトウキビ・紅茶等が栽培されている。



ウガンダでは、日本の支援によるネリカ米の普及などを背景に、コメの需要が高まっています。さらに、プランタインメイズやキャッサバなどの主食作物と比べて調理が簡単で食味も良いことなどから、近年都市部を中心にコメの消費が拡大しています。しかしコメの自給率は低く、国内のコメ生産力の向上は国家的な開発課題となっています。この協力では、コメ関連研究機関における研究開発能力の強化や品質の向上などを支援します。これにより、コメの生産量の増加、農家の所得向上に寄与します。

活動内容

ウガンダ国立作物資源研究所におけるカウンターパート研究者の技術研修



作物の研究に必要な生育調査の理論と方法についてセミナーで伝授



アフリカ特有の土壌の硬盤層の深さとその形態を調査



プロファイル土壌水分計を土中に設置・調査

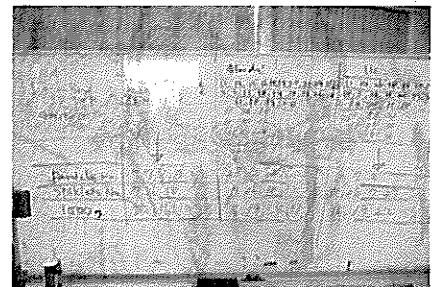
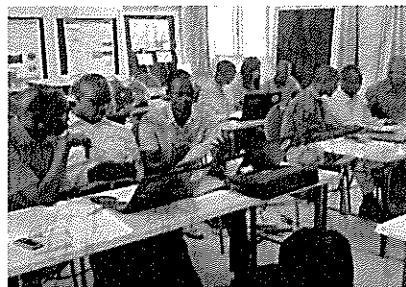


葉面積の測定

ワークショップの開催

国内のイネ研究者を対象に、統計解析から品種選抜および遺伝子型・環境型の交互作用の解析までを教授しました。PCを駆使して慣れない数学に挑戦し奮闘しました。

(左：ワークショップの風景、右：統計解析の結果)

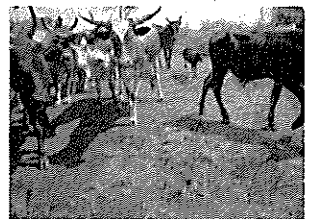
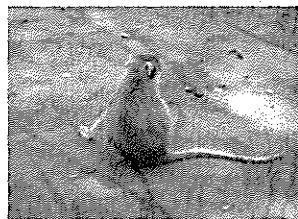


現地実証試験の導入

多様なイネ品種を国内の異なる試験地で栽培し、品種・環境間での生育と収量を比較・検討。どのような地域でも安定収量を示す品種を選抜するのが目的。



おまけ



インターンシップで参加した大学院生 (左：鳥取大、右：鹿児島大) 国内のいたるところが野生の王国でした

まとめ

アフリカの稲作振興計画で、数少ない成功例のウガンダ。一つに、稲作に適した気候条件をあげたい。そして、熱心な農家の人たちの努力も見過ごせない。

イネの研究は、始まったばかりである。まずは稲研究のリーダーとなる中核的な研究者を育てねばならない。そのために、我々ができることを一歩一歩積み重ねていきたいと思う。



ナイル川にてJICA専門家らと (右：筆者)

キリマンジャロ山

元JICAタンザニア個別専門家（機械整備）

稲見 廣政

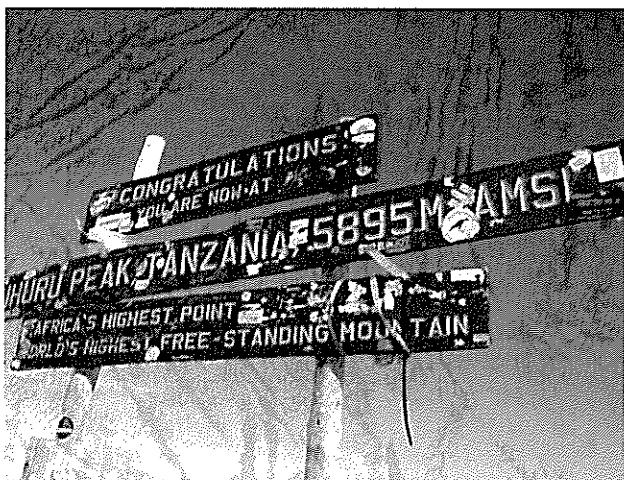
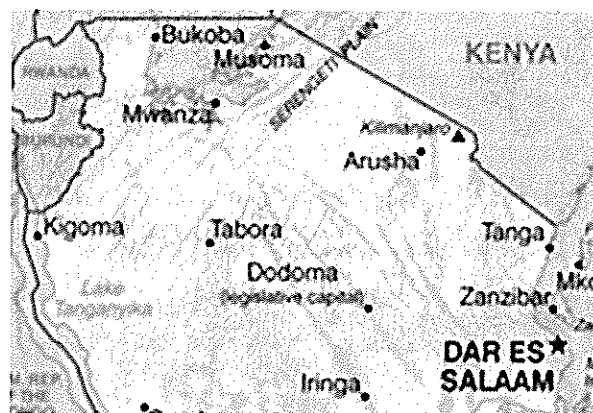
タンザニア共和国に位置するアフリカ大陸の最高峰キリマンジャロ山（5,895m）。この山は赤道付近にあるが万年雪（氷河）を頂き、すそ野が長く、雄大な景観を呈し、姿は日本の富士山に勝ると劣らぬ山であると筆者は感じている。しかし、近年、降水量の減少などの気候変動にともない万年雪（氷河）の規模が縮小しているのが危惧されている。



JICAボランティアの活動：キリマンジャロ山登山

JICAボランティアは、2年の活動期間の真ん中過ぎに任国以外での活動が認められている。そのひとつに、「キリマンジャロ山への登山」がある。

4泊5日（5泊6日）の行程で、3カ所の山小屋に泊まりながら、最後の山小屋“キボ”は海拔4,700m、富士山より高い位置にあり、ここを真夜中に出発し頂上を目指す。



写真の説明：右上－キリマンジャロ山の位置。左上－登頂を目指す途中の朝やけ。左下－頂上に立つ最高峰を記した看板。右中－頂上からの絶景。右下－登頂に成功したJICAボランティア。

大学生の草の根協力

パッションボーイズ農園経営を通じた 鹿児島・若者・世界の地域振興

鹿児島大学熱帯作物学研究室 4年

野間口 智

Satoshi NOMAKUCHI

国際協力において、地域振興事業は多く取り入れられていることと思います。私の知るミャンマーの学校建設団体では、学校建設とともに農業の地域振興事業で収入と維持費を得る活動をしていました。民主化で近代化が進むミャンマー、負の面を受けるのは農業でした。「世界で唯一不変であることは、変化のみである」という言葉があります。ミャンマーの民主化や日本のTPP加入など、変化は良くも悪くも避けられません。だからこそ、私が鹿児島で取り組んだような農業を通じた地域貢献は、これからの世界に欠かせないものになると考えています。

私が鹿児島で取り組んだ地域振興は、パッションボーイズ農園と題したアフリカ米生産、商品開発、販売でした。鹿児島の『新特産品づくり』で『農業』を通じた『鹿児島・若者・世界』を元気づける活動に取り組んできました。新特産品を目指して0から取り組んだ商品「炊くだけアフリカ米チャーハン」は、店頭に並んで数時間でTV取材や新聞記者の前で完売する結果となりました。

私がこの活動を始めたきっかけは、研究と普及、栽培が隔離されて行われる日本の農に問題意識を持ったことです。研究が細分化するほど生産や社会との関連が不明瞭になること。なにより細分化

された研究だけに取り組んでいて、実際に社会へ出て世界を改善する人間として通用するのかということに危機感を持ったことでした。

ならばチャレンジしてやろう。『農業を通して鹿児島を、若者を、世界を勇気づける事業』を起こそう。これがパッションボーイズ農園の設立のきっかけでした。

「アフリカ米を作って、特産品にして売ろうと思う。特産品づくりで地域振興、若者が経営することによる活気づくり、収益金でアフリカの貧困改善を。」農園メンバー以外の反応は冷たいものでした。無理、難しい、規模が大きすぎる。そんな中、まず私たちに立ちほだかった壁が生産でした。アフリカイネは、世界でわずしか生産されていません。しかし、色がついた品種、香りのする品種など魅力的なバリエーションに富み、乾燥でも栽培でき病害虫に強いという長所を持っています。色がついたり香りがしたりと、小包装で単価を高く売れるというもくろみの対価は生産の困難さでした。初年度8月、試食会を開き来年度販売する品種を選抜するために植えた30品種、そのほとんどが水田に倒れこみました。もともと水深が1mほどになる河川付近で栽培される品種のため、水面に葉を出すよう背が高く、水流で折れないよう茎が柔らかいのです。

倒れると管理が難しく、日光が当たらず収穫がほとんどない品種もありました。さらに、ほとんどの品種で、籾が自然に落ちてしまう性質があり収穫が困難でした。初年度の試食会で栽培と味の条件をクリアした品種が、NERICAでした。アフリカイネに日本のイネを交配してきた品種で、倒



NEWS LETTER No.15
伏脱粒がなく味も高評価な香り米です。鹿児島での生産を可能にしてくれたNERICA、純粋なアフリカイネではないですが、アフリカと日本の架け橋としてイネが繋いでくれたように感じました。

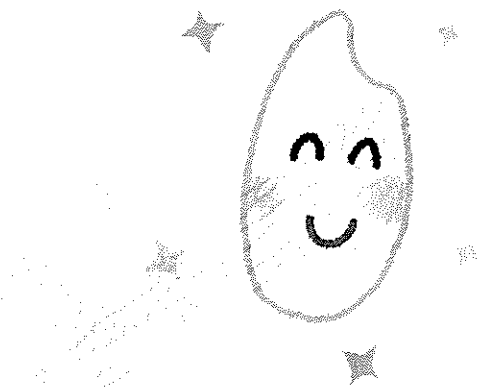
試食会を終えて今年度、NERICAの重点的な栽培を開始しました。今年度栽培したのがNERICAと着色米品種、試食会で次に食味の良かった品種です。それに並行して販路確保と商品開発を行いました。販路は、地域振興の目的を共有し商品を置いていただける店舗様を探して天文館や市内中心に回りました。インターネットや口コミで店舗をリストアップし、営業をかけました。メーカー企業でないと入荷は難しいと断られることもありましたが、ほとんどの店舗が「鹿児島が盛り上がるもの」と協賛していただき、商品入荷の許可やアドバイスなどいただくことができました。天文館の土産屋さんでは、小包装で日持ちするものもいい、和柄がいいなど。アンテナショップさんは、ご高齢の方が多くいらっしゃるの斬新なものより親しみやすいものもいい、などのアドバイスをいただきました。これらのことから、簡単に手に取っていただけるチャーハンという料理、炊くだけでパラパラという手軽さと持ち帰り易い小包装、黒地に家紋を意識したパッケージの「炊くだけアフリカ米チャーハン（右写真）」が誕生しました。

2015年11月20日、市内のスーパーに商品を入荷し販売に至りました。商品を並べる前からお客様からの問い合わせがあったと伺いました。収益金は、WFPの指定献金でアフリカに還元します。鹿児島、若者、世界に鹿児島大学から盛り上げることができたのではないかと考えています。来年度は、鹿児島での栽培をクリアしたNERICAを生かし大規模販売を考えています。課題は「味」。商品開発にさらに磨きをかけることが今後の課題です。



鹿児島を、若者を、世界を農業で盛り上げたいと取り組んだ2年間。私たちの活動が鹿児島の特産品づくりに貢献できたかと聞かれると、まだまだ力及ばないと感じています。確実なことは、商品を置いていただいた店舗を盛り上げることができたということです。しかし、鹿児島大学生が、問題意識を持ってチャレンジした6次産業の試みは各方面で反響を呼んでいます。TV、ラジオ、新聞に連日取り上げていただきました。「私たちの活動をきっかけに鹿児島の農家さん、私たちを含め若者、そしてアフリカ米を通して世界が、自分たちの手で自分たちの生活を良くするための活動を起こしてほしい」と各メディアでの発信を続けています。

出演を通して農家の方や6次産業化に取り組む方とお話しする機会が多くあり、TPPや大規模化、付加価値向上について前向きな生の声を聴くことができました。農家さんを盛り上げようという活動を通して、逆に農家さんから勇気づけられる経験を得ることができました。これからも、人のためになる活動に進取の精神で取り組み、広く発信していこうと誓う2年間の事業でした。

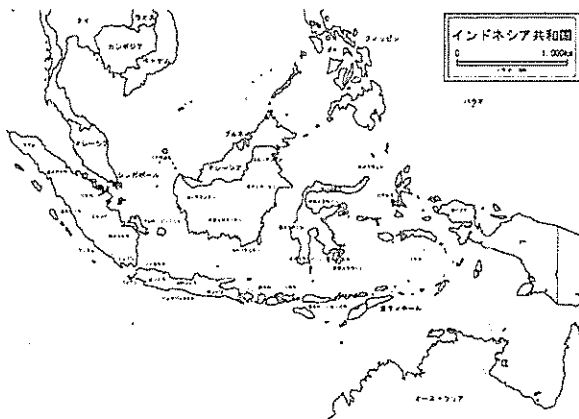


わたしのインドネシア留学

鹿児島大学熱帯作物学研究室 3年

岩田 晋子

Yukiko IWATA



わたしは日本と異なる気候、その気候がこれからの世界の「食」を支える可能性を持つ熱帯地域に興味があり、実際に行ってみたくという思いからインドネシアへの留学を決意しました。留学先のボゴールは雨が多いことで有名で、雨季に入ってから激しい雷雨が毎日続いており、雷は日本で聞いたことがないような大きな音が鳴ります。木が折れたり、停電も起こったりと、気候の違いを感じています。また、気候だけでなく日本と異なる様々なものに日々驚いています。

8月27日の21時頃インドネシアのスカルノハッタ空港に到着し、荷物受取所で荷物を受け取り出口へ向かって歩いているところを、空港職員の背の低いおじいさんに「Are you Japanese?」と話しかけられ、イエスと答えると「Welcome to Indonesia!」と笑顔で言われたことからわたしの留学は始まりました。

出口では所属する研究室の院生の女性の先輩方3人が待っていており、その後Bentoという名前のお店に行き、そこで食べた海老フライがインドネシア最初の食事でした。先輩のうち二人は日本に短期留学をしたことがあり、桜や日本のドラマ・アニメ、特にドラえもんが好きなのだ、と話してくれました。親日の人が多いとは留学前から聞いていましたが予想以上でした。選択科目の中に日本語の授業がある高校があり(他の言語を設置する学校もありま

す。)日本語で自己紹介をしてくれる学生がいたり、突然知らない人に「コンニチハ」と話しかけられたりもします。インドネシア人の友人に将来の夢は何?と質問したら「日本で働くこと。」や「東京大学に留学すること。」と答える人は少なくありません。日本人というだけで握手を求められたこともありました。日本への興味や理解に加え、留学先の大学の学生のほとんどが英語を話すことができる、とてもありがたい環境です。

インドネシアに来て日本とは違うなと感じるひとつは宗教です。インドネシアの人口の76%が信仰しているイスラム教の沢山のルールや、「宗教は何?」「死んだ後はどうなると思う?」「天国は信じる?」など日本でされたことがない質問に最初はとても戸惑いました。女性は髪と首を見えないようヒジャブを被り、豚肉は留学してから一度も口にしていません。ヒジャブを留めるピンをなくした友人が「ピンでヒジャブを固定しないと外に出られない!」と大騒ぎしたこともありました。また彼らは1日5回のお祈りを日課にしており、お祈りの30分程前頃からアザーンというお祈りを促す放送が大音量で流れます。足を骨折して歩けなかった同じ寮のムスリムが友人の肩を借りてお祈りする部屋に行っていたのを見ると、そ



こまでしなくても…とってしまいました。

首をナイフで切る方法で屠殺したハラルの肉しか食べられないのはなぜなのか、麻酔銃で撃ってから屠殺した動物と何が違うのかとムスリムの友人に聞いたら、銃で撃つことは罪。その罪である弾が体に入った瞬間その動物の血が不浄なものになる。しかも心臓が動いているから体全身に血が回ってしまうからダメ、でも首の動脈を切れば、その瞬間に心臓が止まるし、切り口から血が流れるから肉自体が汚れることがないのだそうです。ナイフで切っても動物はすぐには死なないし、苦しめていることになれば、それは罪じゃないの？と聞いても、「動脈を切ればその瞬間に死ぬから大丈夫！」の一点張りでした。留学当初、どれほど突っ込んだ質問をしていいのかわからず一切聞けずにいたのですが、友人から「なんでも聞いていいよ、是非ディスカッションしよう。」と言われてようやく「それはおかしいよ！こうじゃないの？」と指摘できるようになりました。指摘したり質問したりしていると最終的に「だってコーランに書いてあるんだもん。」と言われて終わることがありました。また、悩んだ時の対処法について話したとき、「お祈りをすれば、そのうち解決するから悩まない！」と言われたときは羨ましいなと思いました。（その友人だけかもしれませんが。）しかしそれは考えることを放棄しているだけなのではと思うことも度々で、いまいち理解できずにいます。

もうひとつ日本と違うなと感じることは貧困に苦しむ人が多いことです。物乞いをする人も多く、車椅子に乗った足が折れたままのおじいさんとその家族がじっと地面に座っているのを見たり、外で食事中に小学校低学年ほどの子供に黙って袋を差し出されたりします。その光景を見るたびに

んとも言えない気持ちになります。また治安も悪く、スマートフォンを盗まれる被害に遭った同じ寮の学生が何人かいます。学内でもナイフを持った人が出歩いていたこともあるらしく、夜は一人では出歩けません。今まで気付かなかった日本の豊かさと治安の良さを実感しています。

インドネシアに来てから戸惑うことも多かったのですが、親日で人懐っこいインドネシア人や、同じ寮に住んでいる友人たちのおかげで楽しく過ごせています。また、日本にいたら考えることもなかったことにも遭遇し、貴重な体験をさせていただいていると思います。まだまだ経験できること、吸収できることがあると思うので、与えていただいた機会を逃さないようにしていきたいです。



平成26、27年度「連絡会」総会報告

平成26年度総会

平成27年1月10日(土)に天文館ビジョンホールにて開催された。水上会長の挨拶に続き、JICA九州国際センターから市民参加協力課の田中宏幸課長、青年海外協力隊鹿児島県OB会から木原和代会長からご挨拶を頂き、1)平成26年度活動報告、2)平成27年度活動計画と経費内訳、3)平成25年度決算報告、平成26年度暫定報告が報告され、原案通り承認された。

その他では、NEWSLETTER担当幹事について、加藤先生が辞められたこと、同担当幹事の候補者推薦の要望が出された。また、大内田特別会員から担当交代にあたり挨拶が行われた。さらに、青年海外協力隊鹿児島県OB会との協力や共同活動に関して、総会の合同開催も含め進めて欲しいとの提案があり、協力隊50周年事業(8/22)の機会を生かして具体的に検討することにした。また、活動の広報が難しいことに対して、鹿児島の特性(人づて)活用の提言もあった。

総会に続いて、2回市民公開講演会が行われた。講師は富岡譲二氏(米盛病院救急部長)、演題は「ここをつなぐ 国際緊急援助隊医療チームのやっていること」、参加者は45名(高校生5名)であった。



平成27年度総会

平成28年1月9日(土)に天文館ビジョンホール6階にて開催された。水上会長の挨拶に続き、JICA九州国際センターから顧問の井崎宏所長、青年海外協力隊鹿児島県OB会から桑山昌洋顧問からご挨拶を頂いた。続いて、1)平成28年度からの新役員として、会長：嶽崎俊郎、会計担当幹事：稲見廣政、経歴活用担当幹事：越塩俊介、NEWSLETTER担当幹事：坂上潤一、総会担当幹事：山岡耕作が提案され承認された。また、2)平成27年度活動報告、3)平成28年度活動計画と経費内訳、4)平成26年度の決算報告、平成27年度の暫定報告が報告され、原案通り承認された。

その他では、1)新会員を増やす方策について、新たに派遣される専門家に対し派遣前にJICAから本連絡会の情報を提供し、同会員からも派遣国の情報提供が行える仕組みが構築できれば、お互いに得ることがあるとの提言がなされ、JICA九州でも検討して頂くことになった。2)青年海外協力隊鹿児島県OB会との関係強化の必要性と有効性も提言された。同連絡会として、これまで以上にOB会との関わりを積極的に持ち、関係を強化する方向で活動することとなった。

総会に続いて、3回市民公開講演会が行われた。講師は丸野里美氏(いっしょき学校を作いもんそ会、JICA青年海外協力隊OG)、演題は「運動会を知らないカンボジアの村で運動会が広がった」、参加者は25名(高校生1名、大学生1名)であった。

(総会担当幹事：嶽崎俊郎)

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成15年2月28日)

1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び鹿児島県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、もてる知識・エネルギー等を結集して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結集する。

2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係わる事業を行う。

- (1)政府開発援助（ODA）進展動向に関する調査研究及び提言
- (2)JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3)鹿児島県と海外諸国（特に開発途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動
- (4)会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること

3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者。

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

4. 会長及び幹事

- (1)会の運営を円滑に行うため、当会に会長1名および世話役として幹事4名を置く。
- (2)会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3)幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当る。
- (4)会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5)本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。
- (6)本会に臨時会計役を定め、所定の会計処理を行う。

5. その他

この申し合わせ事項を改変、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、会員の過半数の同意（集会又は郵送による）を得て施行する。

編 集 後 記

本号より、坂上がニューズレターを担当します。本ニューズレターを、広く一般の方々にも触れて読んでいただくために、従来のスタイルにこだわらずにレイアウトの変更や新しい項目を設けました。さらに、本号では、会員の活動報告のみに終始せず、幅広い国際協力に関わる内容を盛り込みました。特に、今後の国際協力を担う若い世代の活動や体験などの情報発信も掲載しました。会員の皆さまからの情報提供、また本会に関わる諸活動への積極的なご参加・ご協力をお願い申し上げます。

編集人：坂上潤一

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報 第15号

発行 2016年1月

発行者 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会長 水上惟文
鹿児島県JICA派遣専門家連絡会事務局

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

鹿児島大学医歯学総合研究科国際離島医療学内

電話：099-275-6853 FAX：099-275-6854

E-mail：takezaki@m.kufm.kagoshima-u.ac.jp

担 当：嶽崎俊郎（たけざきとしろう）